

# 拝啓 瀬戸内寂聴様 四

清重 康代

先生とお別れして、もうすぐ四年、月日は本当に早く過ぎて「瞬く間に」という言葉がぴったりで怖いくらいです。

三月に娘に誘われて、長野県茅野市の蓼科親湯温泉に行きました。粉雪の日でした。行って初めて先生が取材のために訪れた温泉だと知りました。「ここ過ぎて 白秋と三人の妻」の執筆の準備のためだとホテルの小冊子「蓼科の文人たちと恋」に書いてありました。温泉のホームページには訪問は一九八三年と記載されていました。「温泉に行きたいね」というだけの目的で行った一泊二日の旅行でしたが、急に親湯温泉に親近感を覚えました。現在約三万冊の蔵書があり、ライブラリーラウンジ（みすずラウンジ&バーという名称 みすず書房の創業者は茅野市出身）でク

ラシツクな革張りのソファに座って一日中自由に読むことができ、岩波文庫（岩波書店の創業者は諏訪市出身）が回廊の両側の天井までぎっしりと並ぶ岩波回廊もあり、短期間で帰るのが惜しいホテルでした。

寂聴塾の最初の一年が終わった後に先生が著名な講師の方に依頼してくださって徳島塾（月一回）が始まりました。十二回目は先生の講演でした。その中で「徳島塾の一年間で得たものを忘れないで生きる何かにしてほしい」とのお話がありました。「本は活字を読むだけではない」「旅は物見遊山ではない」という内容もノートに残っています。もう一度、雪の季節ではない時に、かつて多くの文人が集った蓼科をじっくり散策する旅に来たいと思いました。次回

は予備知識を得るために文人たちの著書を丁寧に読んで、先生が言っておられたように「土地の抱えている記憶が立ち昇ってくるのを自分で歩いて感じる」旅にしたいと思います。

亡くなる直前まで連載を持たれていた先生が今の私の年齢の頃にどんな仕事や活動をなさっていただろうと思ひ、また、その頃の若い私がどんなことを感じながら先生の話を聞いていたのだろうと確かめたくなり、先生に関する物を引っ張り出してみました。

当時の記憶は四十年以上の時を経て曖昧になってきていますが、残っている記録がいろんなことを思い出させてくれます。自分の字で書いておくこと、きちんと保存しておくことの大切さを感じました。

先生が三十年以上の間発行された「寂庵だより」（全三六六号）の一部も手元にあります。初期の頃の物は実家へ置いてきているので、二〇〇〇年頃からの物があります。ただ、途切れ途切れになっています。年間の購読料の途切れ目のようです。督促の案内を受け取り慌てて入金していた当時の自分を思い出しました。計画的に考えて振り込んでおけば良いのにその頃の私は仕事と子育てとで生活を取

り回すのに精いっぱいだったようです。

「寂庵だより」で一番熱心に読んだのは「寂聴日記」です。「先月先生は何をされていたのだろうか」と細かく読んでいました。例えば二月×日という記載に「何日なのだろう」と自分で想像し「先生の一か月は超人的な多忙さ、健康で過ごしているのが奇跡なのかも」などいろいろ思い巡らせていました。先生がよく「私は『元氣』という病氣なの」と言っておられたことを思い出します。

先生の勧めで発刊し始めた「水瓶座」という雑誌は、十五号で休刊したまま……となっています。現代よりはるかにアナログな時代に「編集会議」と称して今はなき眉山会館に泊まりこんで、数人で額を寄せて夜更けまで話し込んだのも良い思い出です。私は一九八四年創刊号から編集・発行人に名前を連ねてはなくて途中参加者です。おまけに途中で頓挫しています。投稿している回数もすくなく、自身の環境の変化もあつたとは思いますが、日常生活に埋没していたのだと思います。若い頃の反省も含めて、今は時間が自由に使えるので、本をコツコツ読むこと、そしてその内容を自分できちんと咀嚼すること、自分の考えを書き残しておくことに努めたいと思います。